

3
エステル
聖徒伝 208

今、従うべき 権威とは？

エステル記5～7章

エステルの謙遜 ハマンの傲慢

Shikaoichurch.com

アウトライン

0. イントロダクション

I. エステルの直訴 5章

II. モルデカイの報い 6章

III. ハマンの報い 7章

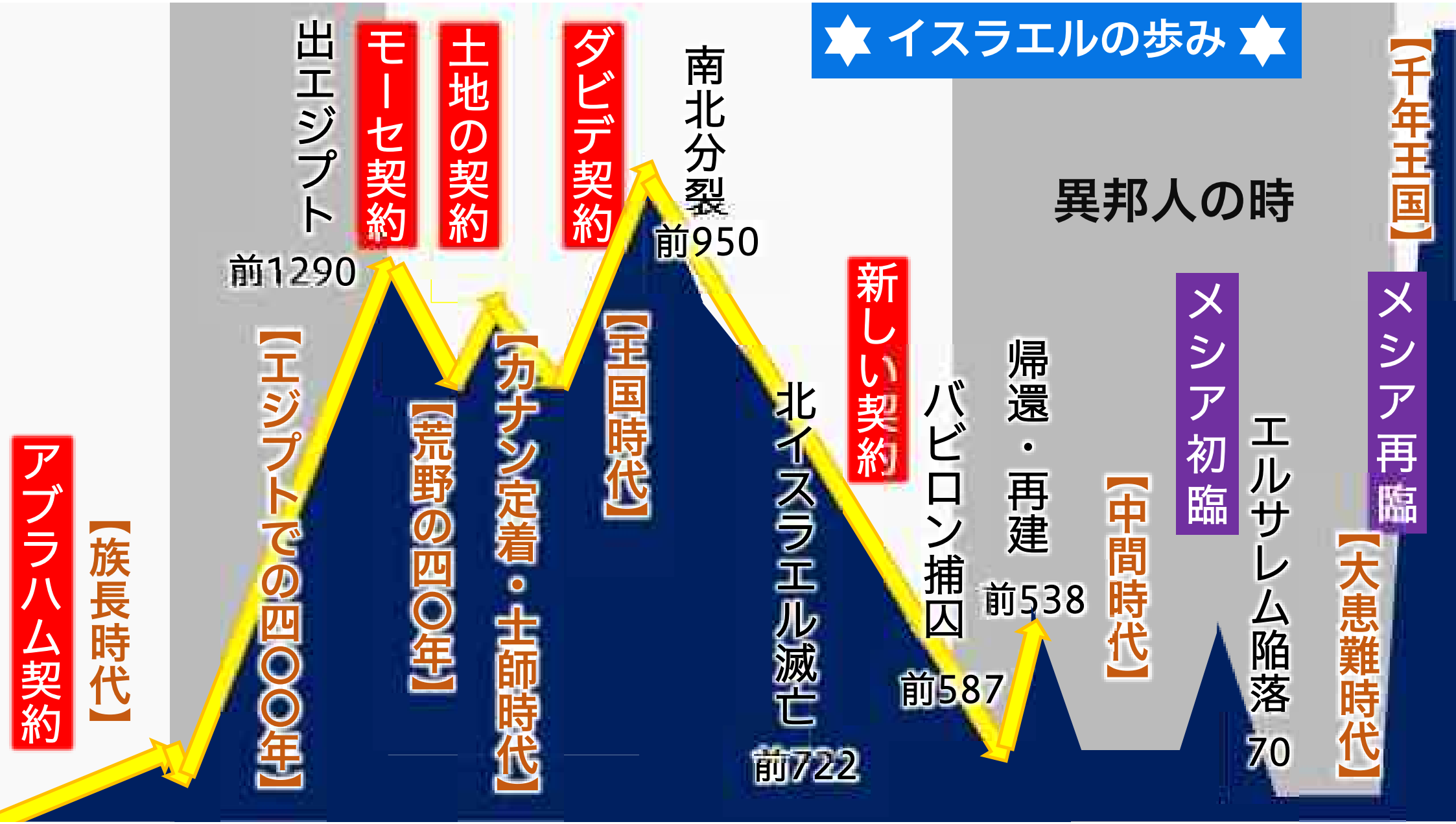
IV. まとめと適用

私たちが従うべき権威とは？



ペルセポリスの遺跡

★ イスラエルの歩み ★



アブラハム契約

【族長時代】

前1290

【エジプトでの四〇〇年】

出エジプト

モーセ契約

【荒野の四〇年】

土地の契約

【カナン定着・士師時代】

ダビデ契約

【王国時代】

前950

南北分裂

前722

北イスラエル滅亡

新しい契約

前587

バビロン捕囚

前538

帰還・再建

【中間時代】

異邦人の時

メシア初臨

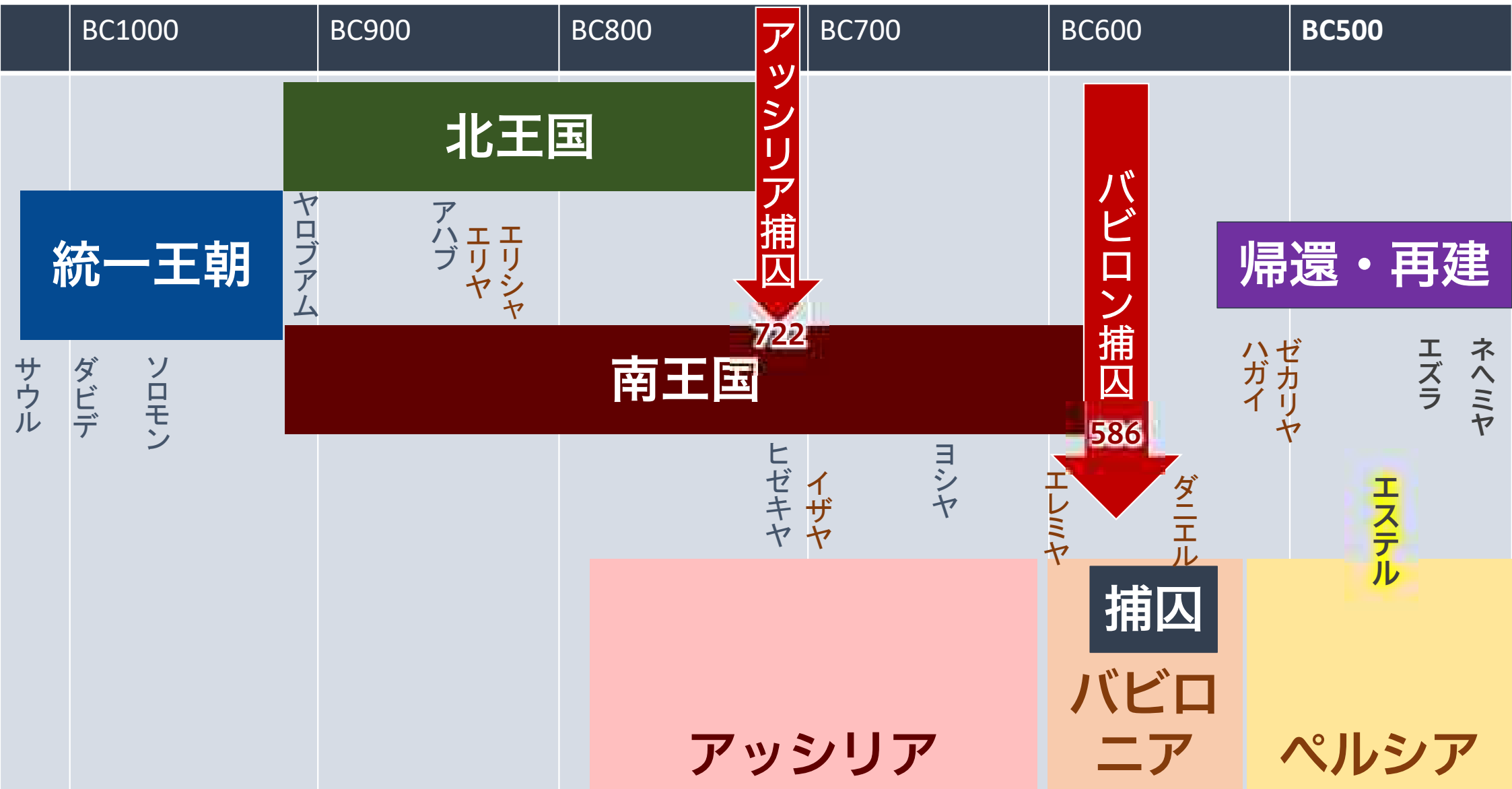
エルサレム陥落
70

【大患難時代】

メシア再臨

【千年王国】

イスラエル王国史



アケメネス朝 ペルシア帝国



エルサレム

バビロン

スサ

ペルセポリス

エジプト

プリムの祭り

■ユダヤ人がペルシャの高官ハマンの策略から救われ、絶滅の危機を免れた歴史上の出来事を記念する祭り

■「くじ」を意味するペルシャ語のプルが語源。

→ハマンがくじで、ユダヤ人全滅の月を決めた

■ユダヤ歴のアダルの月の14日(13日夕から)～15日に行われる。

→2024年は、3月23日夕から25日

■思い思いに仮装を楽しみ、飲んで踊って楽しむ日。

プリムの祭り



前回までのあらすじ

- 国中の候補者から、ユダヤ人エステルが、新たな王妃に選出。
- 王に取り入ったハマンは、自分に頭を下げないモルデカイを憎み、ユダヤ人を全滅させる法案を成立させる。
- 真相を聞いたエステルは、王への直訴を決心した。
「私は、死ななければならないのでしたら、死にます」
- 王の笏が差しのばされれば、謁見することができるが、拒まれれば、エステルは死刑に処せられてしまう。

エステルが越えなければならない障壁

■王妃とは言え、何の権限もない。立ちふさがる三つの関門。

関門① 王の前に出られるかどうか。

関門② 王に、願い事を伝えることができるかどうか。

関門③ 王は、願い事を聞いてくれるかどうか。

■この三段階の、どの場面でも、生死がかかっている。

→王に拒まれた時点で、即、殺される可能性が!!



Ⅰ. エステルの直訴

エステル記5章

ペルセポリスの遺跡

決断 王の前へ エステル5:1～2

三日目になり、エステルは王妃の衣装を着て、王室の正面にある王宮の奥の中庭に立った。王は王室の入り口の正面にある王宮の玉座に座っていた。

王が、中庭に立っている王妃エステルを見たとき、彼女は王の好意を得た。王は手にしている金の笏をエステルに差し伸ばした。エステルは近寄って、その笏の先に触れた。



決断 エステルの申し出 エステル5:3~4

王は彼女に言った。「どうしたのだ。王妃エステル。何を望んでいるのか。王国の半分でも、あなたにやれるのだが。」

エステルは答えた。「もしも王様がよろしければ、今日、私が王様のために設ける宴会にハマンとご一緒にお越してください。」

■ 重大な願いほど、時間をかけ、丁重にもてなし、信頼関係を築く必要がある。

➔ 相手は王。最大限の敬意が求められる



決断 宴会で エステル5:5~6

すると王は「ハマンを急いで来させて、エステルの言ったようにしよう」と言った。王とハマンはエステルが設けた宴会にやって来た。

その酒宴の席上、王はエステルに尋ねた。

「あなたは何を願っているのか。それを授けてやろう。何を望んでいるのか。王国の半分でも、それをかなえてやろう*。」

*この段階で願えば、不躰で無礼な行為に

➡本題を切り出すには、まだ早い!!



決断 再度の招待 エステル5:7~8

エステルは答えて言った。「私が願い、望んでいることは…、もしも私が王様のご好意を受けることができ、また王様がよろしくて、私の願いをゆるし、私の望みをかなえていただけますなら、私が設ける宴会に、もう一度ハマンとご一緒にお越しくください。そうすれば、明日、私は王様のおっしゃったとおりにいたします。」

- 王の寛大さに感謝して、もう一席設ける。
➡ 背後に御霊による知恵があっただろう

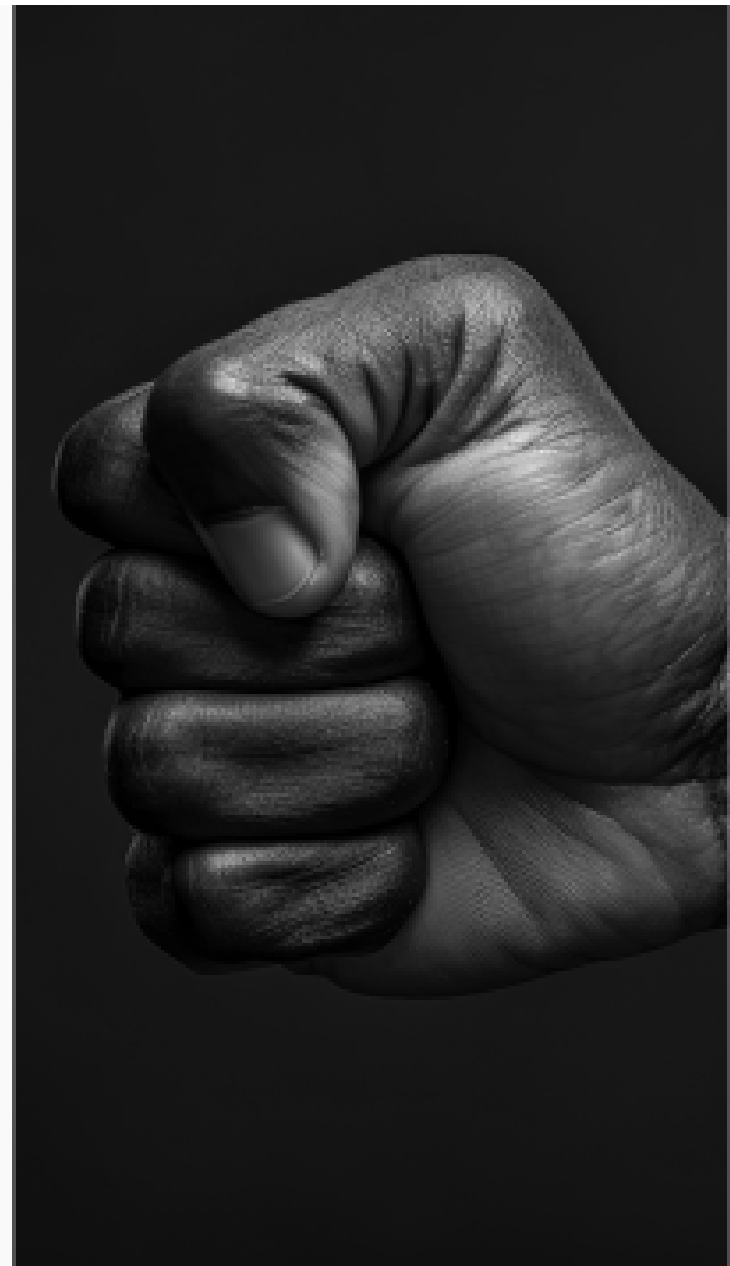


決断

ハマンの憤り エステル5:9～10

ハマンはその日、喜び上機嫌で去って行った。ところが、ハマンは、王の門のところにいるモルデカイが立ち上がろうともせず、身動きもしないのを見て、モルデカイに対する憤りに満たされた。

しかし、ハマンは我慢して家に帰り、人を送って、友人たちと妻ゼレシュを連れて来させた。



決断 ハマンの奢り エステル5:11

ハマンは自分の輝かしい富について、また子どもが大勢いることや、王が自分を重んじ、王の首長や家臣たちの上に自分を昇進させてくれたことなどを、すべて彼らに話した。



決断 ハマンの執着 エステル5:12~13

ハマンは言った。「しかも王妃エステルは、王妃が設けた宴会に、私のほかはだれも王と一緒に来させなかった。明日も私は、王と一緒に王妃に招かれている。

しかし、私が、王の門のところに座っているあのユダヤ人モルデカイを見なければならぬ間は、これら一切のことも私には何の役にも立たない。」



決断 妻の進言 エステル5:14

すると、彼の妻ゼレシュと彼の友人たちはみな彼に言った。「高さ五十キュビト*の柱を立てさせて、明日の朝、王に話して、モルデカイをそれにかけるようにしなさい。それから、王と一緒に、喜んでその宴会にお出かけなさい」ハマンはこの進言が気に入ったので、その柱を立てさせた。

*高さ約22m

■ 処罰を下すのは王の権限

➡ 完全に王様気取りの越権行為





II. モルデカイの報い

エステル記6章

ペルセポリスの遺跡

神の時

記録の書 エステル6:1~2

その夜、王は眠れなかったので、記録の書、年代記*を持って来るように命じた。そしてそれは王の前で読まれた。

その中に、入り口を守っていた王の二人の宦官ビグタナとテレシュが、クセルクセス王を殺そうとしていることをモルデカイが報告した、と書かれているのを見つけた。

*粘土板に楔形文字で刻まれ保管されていた

■二度設けた宴会の間に、この出来事が!!

➡エステルの従順を主が用いられた



神の時

王の疑問 エステル6:3～4

そこで王は尋ねた。「このことで、栄誉とか昇進とか、何かモルデカイに与えたか。」
王に仕える侍従たちは答えた。「彼には何もしていません。」

王は言った。「庭にだれがいるのか。」
ちょうどハマーンが、モルデカイのために準備した柱に彼をかけることを王に上奏しようと、王宮の外庭に入って来たところであった。



神の時

王の問いかけ エステル6:5～6

王に仕える侍従たちは王に言った。

「庭のあそこにハマンがいます。」

王は言った。「ここに通せ。」

ハマンが入って来ると、王は彼に言った。

「王が栄誉を与えたいと思う者には、どうしたらよかろう。」ハマンは心のうちで思った。

「王が栄誉を与えたいと思う者とは、私以外にだれがいるだろう。」



神の時

ハマンの提案 エステル6:7~8

そこでハマンは王に言った。「王が栄誉を与えたいと思われる人のためには、王が着ておられた王服を持って来て、また、王の乗られた馬を、その頭に王冠をつけて引いて来る*ようにしてください。」

*王の権威を与えるということ

➡通常あり得ない、最大限の栄誉



神の時

ハマンの提案 エステル6:9

「その王服と馬を、貴族である王の首長の一人の手に渡し、王が栄誉を与えたいと思われる人に王服を着せ、その人を馬に乗せて都の広場に導き、その前で『王が栄誉を与えたいと思われる人はこのとおりである』と、ふれまわらせてください。」



神の時

王の命令 エステル6:10

すると、王はハマンに言った。「あなたが言ったとおりに、すぐ王服と馬を取って来て、王の門のところに座っているユダヤ人モルデカイにそのようにしなさい。あなたの言ったことを一つも怠ってはならない。」



神の時

祝福と嘆き エステル6:11～21

ハマンは王服と馬を取って来て、モルデカイに着せ、彼を馬に乗せて都の広場に導き、その前で「王が栄誉を与えたいと思われる人はこのとおりである」と叫んだ。

それからモルデカイは王の門に戻ったが、ハマンは嘆き悲しんで頭をおおい、急いで家に帰った。

■完全に逆転したハマンとモルデカイ



神の時

宣告 エステル6:13

ハマンは自分の身に起こったことの一部始終を、妻ゼレシュと彼のすべての友人たちに話した。すると、**知恵のある者たち***と妻ゼレシュは彼に言った。「あなたはモルデカイに敗れかけていますが、このモルデカイがユダヤ民族の一人であるなら、あなたはもう彼に勝つことはできません。**必ずやあなたは敗れるでしょう*。**」

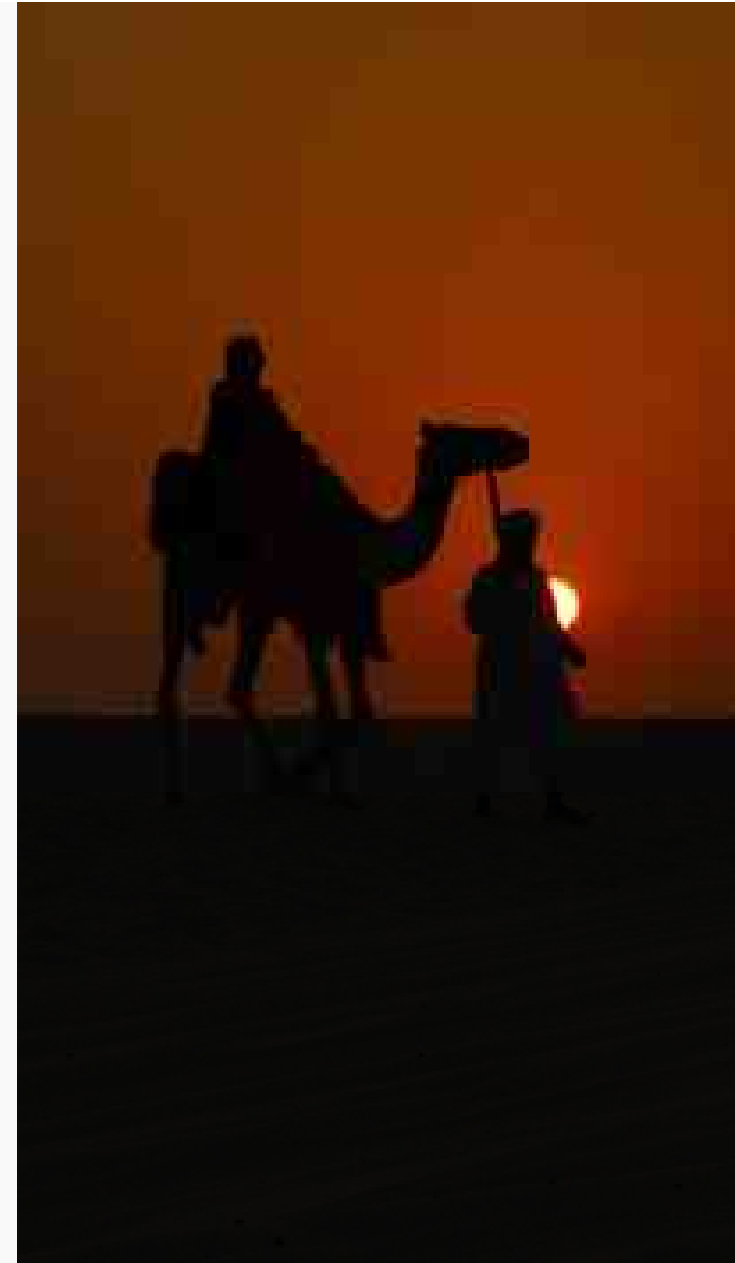
***当人は無自覚に、神の意志が働いている?!**



神の時

宴会へ エステル6:14

彼らがまだハマンと話しているうちに、王の宦官たちがやって来て、ハマンを急がせて、エステルの設けた宴会に連れて行った。





Ⅲ. ハマンの報い

エステル記7章

ペルセポリスの遺跡

好機

二度目の宴会 エステル7:1～2

王とハマンは王妃エステルの宴会にやって来た。
この酒宴の二日目にも、王はエステルに尋ねた。
「あなたは何を願っているのか。王妃エステル。
それを授けてやろう。何を望んでいるのか。王
国の半分でも、それをかなえてやろう。」



告白

エステルの願い エステル7:3

王妃エステルは答えた。「王様。もしも私があなた様のご好意を受けることができ、また王様がよろしければ、私の願いを聞き入れて、私にいのちを与え、私の望みを聞き入れて、私の民族にもいのちを与えてください。」



告発

エステルへの嘆願 エステル7:4

「私も私の民族も、売られて、根絶やしにされ、虐殺され、滅ぼされようとしています。私たちが男女の奴隷として売られるだけなら、私は黙っていたことかもしれませんが、そうはいきません。その迫害する者は、王のお受けになる損失を償うことはできないのですから。」



告発

エステルの告発 エステル7:5～6

クセルクセス王は王妃エステルに言った。
「そんなことをしようと心に企んでいる者は、
いったいだれか。どこにいるのか」

エステルは言った。「迫害する者、敵とは、
この悪人ハマンです」ハマンは王と王妃の前
で震え上がった。



破滅 憤りと命乞い エステル7:7~8

王は憤って酒宴の席を立ち、宮殿の園に出て行った。ハマンは王妃エステルにいのち乞いをしようとしてとどまった。王が彼にわざわざを下す決心をしたことが分かったからである。

王が宮殿の園から酒宴の広間に戻って来ると、エステルのいた長椅子の上にハマンがひれ伏していたので、王は言った。「私の前で、この家の中で王妃までも辱めようとするのか*」このことばが王の口から出るやいなや、ハマンの顔は青ざめた。

*王妃に言い寄っているように見えた?!



処分 ハマンの報い エステル7:9~10

そのとき、王の前にいた宦官の一人ハルボナが言った。「ちょうど、王に良い知らせを告げたモルデカイのためにハマンが用意した、高さ五十キュビトの柱がハマンの家に立っています」すると王は命じた。「彼をそれにかけてよ」

こうしてハマンは、モルデカイのために準備しておいた柱にかけられた。それで王の憤りは収まった。

**自らの罪と傲慢によって
ハマンは、身を滅ぼした**





IV. まとめと適用

私たちが従うべき権威とは？

「王」の権威について確認しておこう!!

- 今の時代には、真実に王と呼べる存在はいない。
 - ➔ 聖書的には、ローマ以降は、王のいない共和制の時代。現在残る王制は、形式だけの象徴的なもの。
 - 例) 日本の天皇は、そもそも王ではなく、祭司に近い
- 王とは、地上にあって、**絶対的な権威**を持つ者。
 - ➔ ペルシアでは、法が王の上にあったが、法を定める権限は王にある
- 王の絶対的な権威は、**神から来た権威**
 - ➔ 王に従うことは、神に従うこと

この時代の大原則

安易な適用に注意!!

ハマンを滅びに至らせた罪

① 神の民イスラエルを呪った

→ アブラハム契約の付帯条項・祝福と呪い(創12:1)

② 主が立てられた王の権威に対する不従順・傲慢

→ 王を差し置いて、モルデカイへの処罰を決める

③ 自らの怒りに身をまかせた。

→ モルデカイへの憎悪

神の民を呪い、自分自身を神とした、ハマンの罪の重さ

エステルへの権威への謙遜と信頼

- ① 権威の前で、自分の身をわきまえた。
→ 生殺与奪の権利は、神と神が与えた権威にある
- ② 権威に対する、最大限の敬意を示した。
→ 安易に願い事を口にせず、最敬礼でもてなした
- ③ 主に全信頼を寄せ、自分のできるベストを尽くした
→ 命をかけた直訴の決断、最大限のもてなし。
忍耐して、時をまって、訴えた。

神の権威の前に、へりくだり、約束の神に全信頼を寄せた

エステルが示した信仰に学ぼう

- エステルが応答しなければ、救いと助けは他から起こされる
➔ モルデカイは、絶対に約束を守られる**主に信頼**した
- 「死ななければならぬのでしたら、死にます(4:16)」
➔ エステルの決断も、約束の**主への信頼**の上にある
- ことを成し遂げられるのは、主ご自身
➔ 失敗や過ちは、悔い改めたらいいだけのこと。
倒れたら倒れたで、やはり**主に信頼**するだけ。

ただ主に信頼して、示されたことにベストを尽くせばいい

弱さや謙遜を装う傲慢に注意しよう!!

- 「こんな罪人が、弱い私が…」と、口癖のようになっていて、「悔い改めます」とも口にするけれど、実際は…。
 - ➔ 実を結ばない。具体的な行動が伴わない。
 - ➔ 一向に変わらない。まったく成長しない。(※注意)
 - ➔ むしろ、自分の課題に向き合うことを頑なに拒む。
- 一見信仰深いようであるが、実は傲慢で独りよがり。絶対化されているのは、主の御心ではなく、自分のお心。
- 私の信仰は、こどもや未信者、深刻な課題に直面する人々に通用する、打ち砕かれた、本当の信仰になっているだろうか？

★ 今の時代に従べき権威とは？ ★

- 今の時代の真実の王は、来たるべき主、イエス・キリスト。
第一に従うべきは、主の御言葉の権威。人はその次※
→「(誰それ)の命令なら従います」というおかしさ。

- 御言葉が常に最上位。
正しい聖書の学びは、正しく権威に従うためにも、必須!!

- 一人一人が、しっかり聖書を学び、適切に適用する力を育む!!
適用力を育てるのは、文脈をつかんだ聖書の学び。

聖書から、主の御心を聞き取り、実行する力を育んでいこう!!

てん とう つみ
「天のお父さま。わたしの罪をゆるしてください

かみ こ
わたしは、神のみ子イエス・キリストが、

① わたしの罪を贖うために十字架で死に、

はか ほうむ
② 墓に葬られ、

みっかめ ふっかつ しん
③ 三日目に復活したこと、を信じます。

き えいこう しゅ せかい しんじつ おう
来たるべき栄光の主イエスこそ、世界の真実の王です。

しゅ みことば けんい わたし したが
主の御言葉の権威に私は従います。

みたま ただ せいしょ まな てきよう ちから はぐく
御霊によって、正しく聖書を学び、適用する力を育ててください。

へんか せいちょう よろこ きょうだいしまい とも あじ
変化と成長の喜びを、兄弟姉妹と共に味わわせていってください。

しゅ な いの
主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」